MUSASHINO for TOMORROW Vol.99

巻　頭
新たなチャレンジに胸躍らせて
上田昭夫

海外音楽事情
モスクワ音楽院から世界の舞台へ ②
イリヤ・イーティン

卒業生インタビュー
人の心に響く曲を作りつづけたい
八木澤教司

表紙：ツォルト・ティバイ（コントラバス）

October 2011
vol.99

新たなチャレンジに胸躍らせて

上田昭夫

㈱フジテレビジョン　スポーツ局スポーツメディア事業部 ゼネラルプロデューサー
TKM7（戸塚共立メディカルセブンズラグビークラブ）GM 兼監督

上田昭夫 *Akio Ueda*

1952年生まれ、東京都出身。慶應義塾大学卒業。東京海上火災保険、トヨタ自動車を経て、フジテレビジョン入社。報道局での記者経験後、「デイトライン」、「スーパータイム」などのキャスター、スポーツキャスターを担当。現在スポーツ局スポーツメディア事業部 ゼネラルプロデューサー。TKM7（戸塚共立メディカルセブンズラグビークラブ）GM兼監督。慶應義塾大学ラグビー部（蹴球部）で主将。'78年、トヨタ自動車のメンバーで日本選手権優勝。'84年から慶應義塾大学ラグビー部監督。大学選手権優勝及び日本選手権優勝（史上初）。'94年から慶應義塾大学ラグビー部監督に復帰し、'00年ルーツ校として創部100周年を大学選手権優勝（3回目、単独初）で飾る。'02、'03年U-21日本代表監督。現在、日本ラグビーフットボール協会競技力向上委員会及び広報委員会アドバイザー。秩父宮ラグビー場FM放送パーソナリティ。著書に、「魂を鍛える」、「王者の復活」（講談社）、「慶大ラグビー 起業報告」（小学館文庫）、「父親のなりかた」（NHK出版）等多数。'86年、東京都都民文化栄誉章受章。

1984年、母校の慶應義塾大学ラグビー部（蹴球部）監督に就任するやいなや同部を対抗戦全勝優勝に導き、'86年には日本選手権でトヨタ自動車を破り日本一に輝いた上田昭夫さん。ところが慶應ラグビー部は上田さんが監督を退いた翌年から長い低迷時代に入ってしまいます。母校の惨状を目の当たりにした上田さんは、'94年、監督に復帰。学生の意識改革から人材確保、チームの運営面まで、部の立て直しに奔走。そして創部100周年となる2000年、見事に14年ぶりに大学選手権優勝を果たしました。そんな上田さんの次なる取り組みが、女子の7人制ラグビー。新たなるチャレンジに意欲満々の熱血監督が、ラグビーと音楽にまつわる興味深い一文を寄せてくださいました。

2019年 ラグビーWC日本大会開催

4年に1回開かれるラグビーのワールドカップ（WC）。第7回目となる今年の大会は、9月9日から10月23日まで、ラグビーの母国ニュージーランド（NZ）で20ヵ国が参加して開かれる。前回の2007年フランス大会では、収益が216億円を超え、サッカーWC、夏季オリンピックに次ぐ世界で3番目に大きな規模のスポーツイベントとなった。また、8年後の2019年には第9回目のWCが日本で開かれることが決まっている。次回2015年のイングランド大会までは、ヨーロッパやオセアニアなどラグビー強豪国での開催が続いていたが、強豪国以外として、またアジアで初の開催となる。日本ラグビーの実力は、残念ながら世界13位で更なる強化が必要であり、2019年日本大会成功の鍵は、“日本が強くなる”ことだ。日本は海外のチームと比べて体格的にハンディがあり、低さとスピード、そしてサッカー日本代表のようなテクニックをさらに磨かなければ太刀打ちできない。日本のラグビーに関わっている人たちにとって、これからの8年間はたくさんの宿題を課せられたことになる。

ロッカールームに流れる音楽

ところで、ラグビーWCにはテーマ曲があり、1991年第2回イングランド大会からワールド・イン・ユニオン（World In Union）となっている。原

曲はグスターヴ・ホルストの組曲「惑星」第4曲「木星―快感をもたらすもの」の中間部[Andante maestoso]に新たな歌詞がつけられている。1991年WC以降、大会ごとに曲調がアレンジされ、少しずつ違う。今年のNZ大会ではどんなアレンジがされるのだろうか？

私が慶應義塾大学ラグビー部（正式には蹴球部）の監督時代には、試合直前のロッカールームでワールド・イン・ユニオンが当たり前のように流れていた。ラグビーをする人間にとってはテーマ曲みたいなもの。試合前は選手が各自ヘッドホンを耳に当てて自らが選んだ曲を聴いて気分を落ち着かせている。ラグビーに限らず、どんなスポーツ選手も同じで、試合本番に向けての準備は大事だ。私が監督当時、選手たちに対してロッカールームに入ったら、このヘッドホンを外すように指示した。キックオフ前にグラウンド状態や風向きなどを確認する必要があり、試合前2時間は情報の収集とそれに対する対策をチームに徹底する時間でもある。指導陣と選手が情報の共有化をすることは不可欠で、ヘッドホンをされていては戦術などが徹底できない。といっても、シーンとしたロッカールームでは落ち着かない。そこで登場したのがWCのテーマ曲だ。音楽は個人の好みがあるため、誰もが納得する曲を選ぶのは難題。監督の好みを押し付ける形で音楽を選び、その結果試合に負けてしまった場合、その原因のひとつが「試合前ロッカールームで落ち着かなかった」となっては困る。そこで誰からも文句が出ないであろうWCのテーマ曲となった。「たかが音楽、されど音楽。」試合前にはどんな細かいことでもクリアにしておく必要がある。

▲ チームが低迷から抜け出せず
険しい表情の上田監督（1997年10月10日）

ラグビーは1チーム15人で構成される。その中の1人の行為や考えでチーム力を落とすようなことがあれば、その影響力は1/15程度ではすまされず、伝染病のようにチームに感染して力は落ちてしまう。監督にとってチームは一つの作品。試合を展示会とすれば、最高の作品になるよう練習を繰り返して作り上げて出展したい。出展では置く場所、角度、照明などにもこだわり、最高の状態で展示する。その結果、より素晴らしい作品があって評価され、表彰されれば、その作品を称賛する潔さも必要だ。最高の作品を作るためには、その過程と展示の仕方まで万全を尽くすことだろう。

吹奏楽から学んだ チームワーク

組織やチームを作る上で、高校の吹奏楽部の練習（演奏）で指揮する先生の言葉が参考になった。小さい頃からラグビーばかりやってきて、音楽にはほとんど縁がなかったが、ラグビー夏合宿のメッカ長野県上田市の菅平高原での出来事は、今でも鮮明に記憶に残っている。吹奏楽部の合宿は、楽器が大きな音を発しても支障がないよう菅平高原を利用することが多いらしい。ラグビーの合宿中に、管楽器、吹奏楽器の音が菅平高原に鳴り響いていることがしばしばある。私の定宿としているプチホテルで合宿をしていた吹奏楽部は、夕食後に食堂を利用して曲を演奏することとなり、隅で聴いていた。ラグビーの夏合宿で生演奏を聴けるとはとてもラッキー。重厚な雰囲気で居眠りなど出来ない。曲が終わり、指揮をした顧問の先生が生徒に話した。

▲ 慶應義塾大学ラグビー部創部100周年に華を添える大学選手権優勝（2000年1月12日）

「今の演奏は、自分たちがこれだけ練習をしたとでも言わんばかりに音を出していただけ。曲を俳句で例えるなら、上の句を聞き、それを受けて下の句に繋げる。その繰り返し。今の演奏は川の流れのようにさらさらではなく、自分が練習してきたことをアピールするかのようにとげとげしい」。8年ほど前のことで、先生が話した詳しい内容は忘れてしまったが、要約すればこの内容。

スポーツでも同じことであり共感した。生徒たちはそれから各自屋外で自分の担当部分を練習。30分後に再び演奏された曲は、先生が注意する前とは別の曲のように柔らかく聴こえた。演奏に魂が入り生き生きしている。「チームワーク」とはどんな組織にも共通することを感じた。実はこの先生が私のファンであったことがわかり、さらに喜ばしかった。名指導者はどこにでも存在していることの証明でもある。

忘れてならない 学生スポーツの原点

一方で最近のスポーツ指導者には

「喝！」だ。私はスポーツ指導者として、スポーツをする資格のある人間は“社会のルールを守れる”ことを常に訴えている。ところが、電車の中で、一目見て運動部と分かる高校生が大きなカバンを一般の客に邪魔となる場所に堂々と置く。また、集団で行動するので、その一角が非常に混む。さらに、座席では足を投げ出して通路を歩く人の邪魔にもなる。他人への思いやりが全く見られない光景を何回も見ている。スポーツは勝つことだけが目的ではない。勝つために努力し、そして試合に勝った時には、敗者を労わる心を持つことも大切だ。試合が終われば同じスポーツをする仲間。ラグビーでは試合終了時にレフリーが「ノーサイド」と発する。試合が終われば、敵ではなくなり同じラグビーの仲間となることの意味だ。

学生スポーツは、人間形成のために学校では教えられないことを身につける場と考える。この原点を忘れているスポーツ指導者が多いことは非常に残念だ。プレーがうまくなる前に、立派な人間に育てることがスポーツ指導者の第一の役目である。そうなればプレーも自然とうまくなるはずだ。スポーツ指導者よ、「何のために指導しているのか？」もう一度問いただしたい。自分を超えた教え子は何人いるのか？ それこそが指導者の誇りであるはずだ。

女子７人制ラグビーの GM兼監督に就任

8月、新たなチャレンジが始まった。サッカーの“なでしこジャパン”が女子ワールドカップで優勝したことは記憶に新しい。その試合を放送したのは、私が勤務するフジテレビ。深夜時間帯にも関わらず多くの人がテレビを見て応援し感動した。そして、女子アスリートの頑張りをより一層スピードアップさせる結果でもあった。

新たなチャレンジとは、その女子の“ラグビー”チームを創設し、自らがゼネラルマネージャー（GM）兼監督に就任したこと。チーム名はTKM７（戸塚共立メディカルセブンズラグビークラブ）で、女子の7人制ラグビーチームだ。去る8月2日に記者発表をし、女子ラグビーで初めての本格的な企業チーム、そして医療法人としても初のラグビーチームを誕生させた。7人制ラグビーは、15人制と同じ広さのグラウンドで7人で戦い、2016年リオデジャネイロ五輪から新たな競技として採用された。一方で、日本のメダル獲得が期待された野球と女子ソフトボールが落ちてしまった。7人制ラグビーは、NZやサモア、フィジーといった五輪では余りメダルに縁のない国にメダル獲得のチャンスがあること。そしてチームの人数がスタッフを含めて15人程度と少ない上、競技スケジュールが2日間で済むこともポイントとなった。

ラグビーが五輪競技となったのは、15人制では1900年、'08年、'20年、'28年の4回の大会。かなり昔のことであり、今回の決定はラグビー関係者にとってとても嬉しいことだ。

こうした流れで五輪出場のチャンスを得た7人制ラグビーであるが、日本ラグビーフットボール協会の強化は遅れ気味。というより、2019年WC日本大会を成功させることが優先順位として上に位置し、特に女子ラグビーは協会に加入したのが遅かった上に、クラブチームしか存在せず、国内の大会もほとんどない環境。五輪に出られるチャンスを得ながら、それを生かすためには民間チームを拠点にすることではないか？ そんな思いから女子ラグビーチーム創設の準備をした。これまでの指導者経験とマネージメント力を生かし、監督だけではなくクラブ運営にも関わるGMも担当している。

▲ TKM7の練習での上田監督

▲ 女子ラグビーチームTKM7の創設記者会見にて（2011年8月2日）

環境作りに奔走、充実の日々

チームの母体となるTMG（戸田中央医科グループ）に所属する医療法人・柏堤会（はくていかい）の横川秀男理事長とともに組織を作った。

まずはチームの環境作り。仕事とスポーツ（ラグビー）を両立させ、職場から応援してもらえる人間関係作りと本人の努力。就業時間内で練習をする分、早出と就業時間後に働くことで、現役引退後には仕事面で遅れを取らないようにしておく。また、ラグビーは危険を伴うスポーツでもあり、私を含めた資格を持つ指導者が5人いる他、医療法人の強みであるメディカルチェックや怪我をした際の対応は万全。サッカーJ2 横浜FC

グラウンドでの練習と食事の提供。加えて戸塚駅ビルに入るスポーツジムの利用とウェアの提供など、現在8つの企業がサポートしてくれ、さらに増える予定だ。女子7人制ラグビーチームの価値を高め、賛同を得るためには選手自身の努力も当然必要。8月は週2回の朝練習とジムトレーニング。9月からは週3回の午後2時間の練習と週5回ほどのジムトレーニングとなる。

スポーツチームはまず環境作りで、人を集めるだけでは長続きしない。五輪を目指す選手が集まる環境を作れば、選手は自然と集まる。仕事を得られ、住む寮、移動用車両、食事に人工芝グラウンドでの練習と手厚い指導。スポーツジム利用にウェア提供、病院という強力なバック。多分、なでしこジャパンよりも良い条件ではないだろうか？ そして、こうした環境を多額の資金で作り上げるのではなく、経費削減やサポートしてくれる企業をいかに集めるかがGMの手腕となる。それがチームのブランディング。

選手たちが仕事をする戸塚共立第1及び第2病院を中心として、TKM7創設で“戸塚”を活性化することが狙いだ。すでにFM戸塚に出演してPRを実施。日本ラグビーフットボール協会の専務理事を訪ね、女子7人制日本代表チームの強化拠点とすることも提案済みだ。将来的に日本代表選手の多くがTKM7に所属してくれれば、練習内容はより充実し、選手たちのモチベーションも上がる。

週何回も通う戸塚。体はやや疲れ気味だが、心地よい疲労はエネルギーになる。これまで経験したことのないことにチャレンジ。自らを信頼して先頭に立ち、スタッフとともに道を切り開く。新たなる挑戦をすることで、指導者としての基本を改めて考え直している。

▲ TKM7の選手、コーチ陣、スタッフ（前列中央が上田さん）

・音・楽・余・話・ 天職？ 芸術の否定？

「私は、宗教的作曲家、カトリックの作曲家という厳粛な地位を得たのです。この芸術領域は広大ですが、熱心に修練することを天職と感じています」。これは、ある作品が初演された後の、フランツ・リストの言葉です。その作品とは《ミサ・ソレムニス》、通称《グランのミサ》。グランとは、ハンガリーの首都ブダペシュトから北西へ約40kmほどに位置する街で、現在はスロヴァキアとの国境にあたり、ハンガリー名をエステルゴムと言います。ここに今もそびえ立つ大聖堂。1856年8月31日、その落成式が行われ、そのために依頼された作品でした。管弦楽の伴奏付きで、演奏に約1時間を要する大作中の大作。1859年の初版は、国費によってヴィーンの帝国印刷所が作りました。9月4日のペシュトにおける再演も大成功となり、それを受けてのリストの言葉だったのです。

その約10年後の1866年3月15日、リストの第2の故郷とも言えるパリで《グランのミサ》が演奏されました。この街には、リストに大きな影響を与えたベルリオーズやドルティグといった旧友がいました。「ベルリオーズが《グランのミサ》を攻撃し、『芸術の否定』とまで非難した時、私のふたりの旧友、ベルリオーズとドルティグは、…私との関係を否定しました。…私には才能がなく、ピアニストとしての成功にとどまっていればよいのだから、作曲にかかわるなどまったくもって間違いである、と結論付けたのです」。これは、15年以上経った1882年2月27日のリストの言葉です。旧友からの酷評は、生涯消え去ることのない傷をリストの心に残したと思われます。

このミサ曲が、今夏、草津の国際音楽祭で18年ぶりに演奏され、その素晴しい合唱と歌手による演奏を私は聴く機会に恵まれました（私自身はブダペシュトのリスト音楽院で聴いて以来の体験でした）。やはり18年前の1993年、武蔵野音楽大学室内合唱団がハンガリーに演奏旅行に行った際に、エステルゴムの大聖堂で行われたCantemus '93国際合唱フェスティヴァルに出演し、このミサ曲を演奏しています。「天職」であれ、「芸術の否定」であれ、エステルゴムの大聖堂で、この曲が響き渡る時空間を体験したいものです。

▲ ハンガリー：エステルゴム市大聖堂での本学室内合唱団合同演奏会

福田 弥（本学音楽学講師）

海・外・音・楽・事・情

モスクワ音楽院から世界の舞台へ ❷

●イリヤ・イーティン教授（ピアノ／本学客員教授）●

本学客員教授のイーティン先生に、ご自身のこれまでの音楽人生を振り返っていただく企画の後編をお届けします。前号では、神童さながらの子供時代のエピソード、モスクワ音楽院で出会った教授や仲間達との思い出を伺いました。本号では音楽院卒業後の世界デビュー、挑戦した多くの国際コンクールやそれが縁で巡り会った音楽家、オーケストラなどについて語っていただきました。聞き手は、本学 福井直昭教授です。

国際コンクールへの挑戦

福井　モスクワ音楽院をご卒業後、いよいよ多くの国際コンクールに挑戦されます。

イーティン　1990年にアメリカのワシントンD.C.で開催された「ウィリアム・カペル国際ピアノコンクール」で第2位を受賞しました。この結果、私はアメリカに在住するようになりました。この時の1次審査はテープ審査だったのですが、私は録音機器を持っていなかったので友人に借りました。しかし、そこは当時のソ連製ですから、実にひどい録音状態だったと記憶しています（笑）。またその頃は、ソ連から国外に出ること自体が非常に難しく、許可が出て飛行機のチケットを渡されたのは、まさにコンクール開催前日でした。演奏曲目は殆どが自由曲ながら膨大な量を要求され、本選で弾く協奏曲も3曲用意しなければなりませんでした。準備していた3曲のうち私はラフマニノフを弾きたかったのですが、見事にベートーヴェンを指定されました（笑）。

福井　ラフマニノフなら優勝だったかもしれませんね（笑）。翌年はソルトレイク・シティ（アメリカ）の「ジーナ・バッカウアー国際コンクール」で第3位に入賞され（モーツァルト賞、プロコフィエフ賞も併せて受賞）、同年、同じくアメリカで開かれた「ロベール・カサドシュ国際ピアノコンクール」で第1位を受賞されました（ショパン賞を併せて受賞）。

イーティン　「ロベール・カサドシュ国際コンクール」はクリーヴランドで開催されたので、当時クリーヴランド管弦楽団の音楽監督を務めていたクリストフ・フォン・ドホナーニに会うことができ、後にソリストとして彼の指揮による同管弦楽団と協演しました。このコンクールは、現在では「クリーヴランド国際ピアノコンクール」と名前を変えています。

サイモン・ラトルとの出会い

福井　その後1992年イスラエルでの「アントン・ルービンシュタイン国際コンクール」第3位入賞を経て、1996年に四大コンクールの一つにも数えられる「リーズ国際ピアノコンクール」で見事優勝。同時に現代音楽賞、BBC聴衆賞も受賞されています。

イーティン　BBC聴衆賞は、本選を観たテレビの視聴者が、誰が良かったかを電話で投票するもので、たしか2万人位の方が私に投票してくださいました。第2位は半分の1万人くらい、だいぶ私のほうが多かったはずです（笑）。

福井　このコンクールは入賞者にコンサート出演の機会を多く与えるため、レベルの高い参加者が数多く出場すると聞きます。

イーティン　確かにこの成功は、私の国際的なピアニストとしての立場を確立してくれました。日本にも招待され、東京のオーチャードホールで東京交響楽団とラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」を協演したり、津田ホールでもリサイタルを開催しました。しかし最も重要だったのが、現在ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督であるサー・サイモン・ラトルとの出会いです。当時バーミンガム市交響楽団の音楽監督であった彼こそが、本選での指揮者でした。私は本選当日の朝の打ち合わせで、初めて彼に会いました。午後のオケとのリハーサルの後、彼は私にこう言ってくれました――「コンクールの結果がどうであろうと、君をソリストとしてツアーに連れて行こう」。そして2年後、本当にラトル率いるバーミンガム市交響楽団（CBSO）とのヨーロッパ・ツアーが実現したのです。しかも、それは翌年からベルリン・フィルの指揮者に就任することが決まっていた彼の、同オケの指揮者としての最後の

ツアーだったのです。

福井　先生がご自身の力で掴まれたこととはいえ、大変幸運なことでしたね。ラトル氏とは何の曲を協演されたのですか？

イーティン　ラトル氏から何を弾きたいのか尋ねられたので、私は「プロコフィエフの2番」と答えました。しかし即座に「ダメだ。ウィーンではウケない。ラフマニノフの3番にしよう」と返答され、結局その通りあまり弾きたくなかったラフマニノフ第3番になりました(笑)。それでも勿論、素晴らしい体験となりました。

多くの国で多くのオケと協演

福井　当時はCBSOの他に、どのようなオケと協演されましたか？

イーティン　ロンドン・フィルやフィルハーモニアをはじめとする多くのイギリスのオケ、更にヨーロッパのみならず多くの国々のオケと協演しました。フィルハーモニアとはミハイル・プレトニョフの指揮の下、ラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」を演奏しましたが、ご存知の通りプレトニョフは名ピアニストでもあります。当然曲の何から何まで熟知していたので、大変緊張したのを覚えています。お陰様で演奏会は成功しましたが(笑)。

福井　ヨーロッパ以外にはどこに行かれましたか？

イーティン　トルコ、中国、それにインドにも行きました。インドのムンバイではブラームスの2番を弾きました。とにかくこの頃は、都市によってはオケとの協演に加えリサイタルも開いたので、次から次へと新しい曲を弾かなくてはなりませんでした。私は元来、新しい曲に対しては時間を充分使い、自分の中で熟成させたいタイプなのですが、短期間で協奏曲のレパートリーを多く持つことができ、今となっては大変良い経験であったと思っています。

福井　その頃のリサイタルではどのような曲を中心に弾かれましたか？

イーティン　当時も各国のインタビューで、ロシア人である私に対し「ラフマニノフやプロコフィエフは得意だが、ドイツものは苦手」といった類の先入観というか、決めつけでもって質問されることが多かったですね。それらに対し、私はいつもこう答えていました、「私はどの作曲家の専門家でもない。自分がその時弾く曲の専門家である」と。

福井　先生の演奏家としてのプライドを垣間見たような、素敵なお答えです。

イーティン　事実、私は自分がベートーヴェンを弾く時はベートーヴェンの、シューベルトを弾く時はシューベルトの、シェーンベルクを弾くときはシェーンベルクの専門家だと思って演奏しています。でも実際シェーンベルクは弾かないのですが…(笑)。ちなみにメシアンは弾きます。

福井　ちょうど今度武蔵野で開かれるリサイタル(10月13日：ベートーヴェンホール)でもメシアンは演奏されますね。この日のリサイタルはバッハから現代曲までを網羅した非常に興味深いプログラミングですが、ご自身から演奏会のコンセプトについて簡単にご説明願えますか？

イーティン　プログラム全体の中で、

▲ 前号で話題にのぼったモスクワ音楽院のナウモフ教授(左端)と、夭逝した同門のスルタノフ氏(中央)。一番右が若き日のイーティン先生

神聖な音楽と世俗的な音楽を巡ることを目的としています。バッハや、メシアン、ベートーヴェンの作品は疑いなく、深遠で精神的な曲ですが、一部世俗的な要素も内包しています。現代作曲家ワイナーによる作品は、初期のジャズ風、ラグタイム風の雰囲気です。また演奏するバッハの2作品とベートーヴェンのソナタの間には関連性がありますが、ここでは詳細は省略いたします(笑)。

福井　今から大変楽しみにしております。では最後に武蔵野の学生にメッセージをお願いします。

イーティン　学生の皆さんは、勿論一人ひとり才能は違います。しかし「少しでも上手になろう」という気持ちを持ち続けること自体が、一番大切な「才能」です。皆さん、音楽を愛し、音楽に対し好奇心を抱き、音楽に対し常に情熱的でいてください。

福井　2号にわたり長時間の貴重なお話を頂き、有難うございました。

イリヤ・イーティン *Ilya Itin*

モスクワ音楽院にてL.ナウモフに師事。ウィリアム・カペル国際ピアノコンクール第2位、ロベール・カサドシュ国際ピアノコンクール第1位、1996年リーズ国際ピアノコンクールにおいて優勝。クリーヴランド管弦楽団、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団等と協演する他、S.ラトル、N.ヤルヴィ、V.シナイスキー、M.プレトニョフなど著名な指揮者と共演。ニューヨーク市立大学、プリンストンのゴランスキー・インスティテュートにて教鞭をとり、ジュリアード音楽院にも度々招かれている。'11年4月から本学客員教授に着任。

卒業生インタビュー

人の心に響く曲を作りつづけたい

● 八木澤教司（作曲家）●

東日本大震災以後、さまざまな場所で演奏され、歌われ、人々に癒しと勇気を与えている曲があります。その曲『あすという日が』を作曲したのが武蔵野の先輩、八木澤教司さん。作曲家としてばかりでなく、客演指揮者、指導者、音楽誌執筆など多方面で忙しく活躍されるなか、お話を伺いました。

八木澤教司 *Satoshi Yagisawa*

岩手県生まれ。昭和第一高等学校卒業。1999年武蔵野音楽大学作曲学科卒業。'01年同大学大学院音楽研究科修士課程修了後、研究員として2年間の研鑽を積む。吹奏楽曲の代表作はアメリカのGIA吹奏楽指導書で紹介される他、オランダのデ・ハスケ社から多数出版、ノーステキサス大学ユージーン・コーポロン指揮者講習会の課題曲に選定、世界吹奏楽大会WASBE（シンガポール・台湾）、ミッドウェスト・クリニック（シカゴ）で演奏されるなど、海外から国内に渡り幅広く親しまれている。又、これまで全国植樹祭、国民体育大会、全国高等学校総合体育大会の音楽から、校歌の作曲も担当し、'10年に開催された"ゆめ半島千葉国体"では式典音楽総合監督を務めた。その他、各種コンクール審査員、客演指揮、指導、講演、音楽雑誌執筆に加え、音楽出版社のプロジェクトアドバイザーなどを務める。第21回日本管打・吹奏楽アカデミー賞［作・編曲部門］（'11年）受賞。平成23年度JBA下谷奨励賞受賞。現在、尚美ミュージックカレッジ専門学校講師。

■ 公式ホームページ
http://www.sounds-eightree.com/

作曲家を志すきっかけ

高校の恩師が武蔵野音楽大学の出身ということもあり、影響を受けて進学を心に決めました。私が作曲家を志すことを決意したのは中学2年生の時。全く音楽に興味の無かった私が突然、吹奏楽部に入部して1年が経過した頃でした。きっかけはヴェネツィア楽派を代表する作曲家のジョバンニ・ガブリエリの音楽に出会ったこと。教会旋法を用いた対位法的楽曲の世界観に素人ながら心を奪われ、毎日のようにCDを聴きました。そして次第にイタリアの音楽全般に興味を持ち、いつか私も多くの人々の心に響く音楽を書きたいと夢を持って1995年武蔵野に入学したのです。

自分の原点でもある吹奏楽の道へ

大学を卒業して大学院へ進んだ頃の私は、雑誌の付録の編曲などの小さな仕事はあったものの"本当に将来音楽で生活していけるのか"という現実に直面。大好きな音楽を学ぶ反面、大学院修了が近づくに連れて不安も強くなりました。両親には大学院まで行かせてもらって、このまま芽も出ずに音楽を諦めてしまっては…と申し訳ない気持ちと焦りもありました。ですが幸いにも武蔵野の先生方は親身に相談に乗ってくださいましたし、先輩や同期の仲間たちとお互いに励まし合うことで将来への夢を持ち続けることができました。

そして大学院修了が迫り修士論文の制作に追われていた頃、運命の時

▲ 武蔵野時代の八木澤さん（後列左）

が訪れました。未出版・未発表の邦人吹奏楽作品を公募し東京芸術劇場大ホールで演奏会を行う、吹奏楽界の大イヴェントである21世紀の吹奏楽"響宴"に作品が採用されたのです。応募したのは大学1年生の時に書いた作品で、まさか採用されるとは思っていませんでした。この演奏会で作品を演奏して頂くことになったのは、武蔵野の先輩でもあり現在、講師も勤められている佐藤正人先生が指揮する川越奏和奏友会吹奏楽団。佐藤先生とは初対面でしたが、作品に対して厳しくも的確なご助言を頂きました。「八木澤さん、吹奏楽曲を書いていきたいなら現場を知らないと。これじゃあ中学生や高校生は吹けないですよ」。

日本の吹奏楽はスクールバンド、教育現場が主体となっています。佐藤先生のおっしゃるように"作曲"の知識だけではなく"現場"を知らなくてはならない。音大生やプロの奏者が容易に演奏できても、楽器を始めたばかりの中学生にできる楽譜を書くためにはまた別の知識が必要でした。ハッと気づき、悔しさもあり、先

生に尋ねました「どうしたら現場を学ぶことができますか？」。結果として大学院を修了してからの研究員2年間は、武蔵野に通いつつ佐藤先生が吹奏楽指導をされる“現場”を毎週欠かさず見学させて頂きました。そのご指導は目から鱗で吹奏楽指導のための知識はもちろん、どうしたら無理なく良い響きが得られるかといったオーケストレーションまでも学ぶことができました。最近になって佐藤先生はこうおっしゃいます「あの時は武蔵野の後輩である八木澤さんだからこそ、あえて厳しく言ったんですよ」と。

そして遂に私の作品が全国に広がるきっかけとなった《吹奏楽のための音詩「輝きの海へ」(2002)》が完成。委嘱元である田川伸一郎先生指揮、千葉県市川市立新浜小学校吹奏楽部が同曲を演奏し平成14年度TBSこども音楽コンクール文部科学大臣奨励賞〈全国1位〉を受賞しました。サントリーホールにて記念演奏を行うことで広く知られることとなり、日本中のバンドが翌年から選曲。佐藤先生も真っ先に全国各地で演奏してくださいました。これを機会に夢であった作曲家への道が開かれたのです。

▲ 恩師、佐藤正人先生とリハーサル

日本管打・吹奏楽アカデミー賞受賞と今後の目標

時を経て本年、第21回日本管打・吹奏楽アカデミー賞[作・編曲部門]を受賞。並びに陸上自衛隊北部方面音楽隊創隊50周年記念委嘱作品として北海道の四季と自然の雄大さを描写した《交響詩「母なる北方の大地 ―すべての生命を讃えて」(2010)》が、平成23年度JBA（日本吹奏楽指導者協会）下谷奨励賞を受賞。この作品は海外に頻繁に招かれるようになった現在の環境からヒントを得て作曲したもの。アメリカ、ヨーロッパ、アジアの人々や風土に接して改めて気づいた日本の四季や文化の素晴らしさを、自分なりの音楽語法で仕上げた作品です。デビューして10年目という節目を迎えたこの年に二つの賞を受賞できたことは感慨深く思い、これまで私を支えてくださった多くの皆様のお陰だと感謝しています。

今後の目標としては、既に近年活動を開始している海外での客演指揮や指導などの仕事に力を注いでいきたいと思っています。きっかけは2年前、シカゴで毎年開催されているミッドウェストクリニックに初めて招待された時、私の作品を演奏しているという各国の吹奏楽指導者からたくさんのお声をかけて頂いたことに始まります。会ったこともない、話したこともない、ましてや言語も違う人たちがこんなに私の作品を愛してくださっている現実を直接知ることができたのは新鮮な体験でした。また中学生の時に初めて演奏した曲の作曲者でもあるジェイムズ・スウェアリンジェン氏をはじめ、世界の憧れの作曲家たちが温かく接してくださったのにも感激。その後、シンガポール政府より吹奏楽コンクールの課題曲を委嘱される他、ニューヨークのホフストラ大学シンフォニックバンドからの委嘱を受けるなど、現在は日本全国各地を行き来すると共に、年に幾度も海外への遠征をこなす毎日を送っています。これからも作曲家としての活動を続けつつ、日本と海外の若い世代の応援者としても様々な活動を展開したいと意気込んでいます。

▲ ジェイムズ・スウェアリンジェン氏と
シアトルの演奏会にて

東日本大震災復興ソング《あすという日が》

一方、2011年3月11日に起きた東日本大震災によって、私は作曲家として、音楽家として何もできない無力感でいっぱいな日々を過ごしました。私自身が東北出身であることに加え、被災地は多くの仲間たちが住む大切な場所。私も地震の直前まで仙台で講習会をしていましたし、地震の翌日には福島にも行く予定になっていたので、強いショックを受けました。毎日のように現実とは思えないようなニュースの映像を見て、絶望すら感じかけていました。しかしある夜、仙台市立八軒中学校の生徒さんたちが避難所になっている学校で被災者に対して合唱曲をプレゼントとして歌った様子が、NHKのニュースで放映されました。被災者が涙を流しながら聞いている姿に多くの視聴者が感動し、曲名についてNHKに問合せの電話が殺到したと聞きました。後からこの合唱曲が私の《あすという日が》だと知り、胸が熱くなり涙が溢れました。自分の音楽がこんなところで人々の心に届いている、私の音楽が少しでも人の役に立てている…。改めて音楽の持つ素晴らしい力を感じ、被災地の中学生から逆に私が励まされたようにも思えました。

《あすという日が》は5年前に大阪

▲ Nontri Orchestra Wind（タイ）の客演指揮。
クラリネット独奏：三浦幸二氏（1998年卒）

で開催された「第30回全日本合唱教育研究会全国大会」の委嘱で書いたもので、武蔵野の同期で大親友である小野慎也くんが勤務する教育芸術社から出版されることもあり縁を感じながら作曲した作品（小野くんは学生時代に作品発表会の初演指揮者も務めてくれました）。また初めて合唱曲の委嘱を頂いたこともあり、山本瓔子（ようこ）先生の温かく優しい詩を何度も読み返し心を込めて音を付けさせて頂いた想い出深い曲です。八軒中の奇跡の歌声が話題となり、NHK「歌謡コンサート」では《涙そうそう》で知られる夏川りみさんが熱唱された他、NHK「おはよう日本」、フジテレビ「とくダネ！」、TBS「朝ズバッ！」、各種新聞などで“東日本大震災復興ソング”“希望の歌”として取上げられました。9月21日には夏川りみさん、《千の風になって》で知られる秋川雅史さんがそれぞれビクター、テイチクとレコード会社の垣根を越えて同時にCDリリースを発表と、今や私の知らないところで大きな広がりを見せています。私の生み出した音楽が多くの人の気持ちと重なり、勇気の源になっていることを嬉しく思っています。

武蔵野で学んだこと、若い世代に学んで欲しいこと

大学時代、作曲学科の先生はもちろん他の学科の先生方にもとても可愛がって頂きました。やはり直接、プロの世界で活躍している先生方からレッスンだけではなく体験談を伺えたり、一緒に食事をしながら音楽についてお話できたことは大きな収穫でした。そして私が何よりも恵まれたのは仲間たちです。行き詰まって悩んでいる時に支えてくれた仲間たちとは、今でもお互い音楽家として仕事の現場で再会します。特に邦人吹奏楽作品の開発をするウインドアート出版代表を務める神長一康さんは同じ作曲学科で全てのクラス授業を共にした親友ですし、サクソフォーンのアンサンブル作品を共に開発してきたVive! Saxophone Quartetの浅利 真くん、吹奏楽界の人気ゲストピアニストとして活躍する織茂 学くんも大学の同期。また最近の海外での講習会や客演をご一緒するクラリネット奏者の三浦幸二さんは一つ上の先輩。大学時代に喜怒哀楽を共にした仲間と今でも繋がりが持てている幸せ、彼らに出会えたことは財産です。

各地を仕事で旅をする度に必ず武蔵野出身の音楽家や学校の先生に出会い、共通の話題で初対面から盛り上がることができるのも嬉しいことです。まさに武蔵野では“仲間の大切さ”“絆の深さ”を学んだと強く感じています。武蔵野で学ぶ、学ぼうとしている若き世代の皆さんには夢を持ち、その夢を実現するために多くの濃い仲間を作って頂きたいと思います。そういった環境を体感できるのが武蔵野です。母校の才能豊かな後輩たちと現場で出会い、共に音楽を奏でられることをいつも心から楽しみにしています。

音楽の万華鏡 ⑰

作品の衝撃

作曲された当時この作品はどのように演奏されていたのだろう、という関心が向くのは主として18世紀以前の作品だろうと思われますが、今から40～50年ほど前に作曲された作品についても、作曲当時の演奏を蘇らせようとする動きがあります。たとえばナクソス・ジャパンは、戦後作曲された日本の作曲家による作品の、初演あるいは初演後まもない演奏、すなわち作曲当時の時代の息吹が伝わってくる演奏のCD化を始めています。

しかし、演奏家にとって40～50年前の若い頃の演奏は不本意なのでしょうか、音源があっても収録が望まれなくて、CD化できない場合もあります。聴く側にとっては、新しい作品を初めて音にする緊張感が伝わってきて、引きつけられる演奏なのですが。

収録された演奏のうち、たとえば武満徹《ノヴェンバー・ステップス》（1967）の作曲から2年後のN響定期での演奏を聴くと、琵琶、尺八とオーケストラがきわめて緊張した関係にあるのが伝わってきます。琵琶、尺八の威厳のある凝縮された音にオーケストラがおののき、それを受け入れてわたり合うためにオーケストラは各自に割り当てられた音を克明に奏して、大量の音を密集させた群的な響きを発することに集中しています。《ノヴェンバー・ステップス》の最近の演奏では、オーケストラの群的な響きがしなやかな響きになり、琵琶、尺八とオーケストラがなめらかに繋がれていく傾向にありますが、それとは対照的です。

作曲時からまもない演奏にとっては目の前に立ちはだかっていた作品を、最近の演奏は、歴史的パースペクティヴの中にとらえているということなのでしょう。巨大な作品が、遠くに小さく見えるようになる、ということなのかもしれません。過去の作品に対して、当時の演奏習慣を調査することに加えて、その作品が放った衝撃をつかむことも大事と思います。

楢崎洋子（本学音楽学教授）

各地で喝采！ ウィンドアンサンブル＆管弦楽団 演奏会

ウィンドアンサンブル演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの演奏会が、吹奏楽のメッカ、アメリカでもトップに位置するレイ・E.クレーマー氏（本学名誉教授）の指揮のもと、7月11日、京都会館第一ホール、翌12日に愛知県芸術劇場コンサートホールで、さらに15日には、東京オペラシティコンサートホールで“東日本大震災復興支援”として開催されました。

京都府および愛知県の同窓生の多大なお力添えにより、両ホールには中高生をはじめ、指導者、吹奏楽関係者も大勢来場くださり、今年度全日本吹奏楽コンクール課題曲から、古典的作品G.ホルスト「吹奏楽のための第二組曲 ヘ長調」や20世紀の名作P.A.グレインジャー「リンカンシャーの花束」、F.ティケリ「エンジェルズ・イン・ジ・アーキテクチャー」などを披露。一方、第2部冒頭では、大震災の犠牲者の方々へ哀悼の意を込めて、H.グレツキ「すべては神のもの」（クレーマー教授編曲）が演奏され、学生たちの震災に対する強い思いのこもった柔らかいサウンドに、客席は深い感動に包まれました。

また、京都では演奏会に先立ち、クリニックを開催。多くの指導者が聴講する中、ウィンドアンサンブルメンバーと地元高校生との合同バンドでのリハーサルを行った他、クレーマー教授による指揮講座が繰り広げられました。

▲ ウィンドアンサンブル演奏会（東京オペラシティ コンサートホール）

管弦楽団演奏会

ウィンドアンサンブルの公演に続き、9月には本学管弦楽団が埼玉（9/4 川越市市民会館）、東京（9/9 東京オペラシティコンサートホール）、北海道（9/11帯広市民文化ホール 大ホール、9/13 旭川市民文化会館 大ホール）と、各地で演奏会を開催しました。

▲ 管弦楽団演奏会
（東京オペラシティ コンサートホール）

カールマン・ベルケシュ本学客員教授の指揮のもと、グリンカ：≪ルスランとリュドミラ≫の軽快な序曲で開幕。続くグリーグ：≪ピアノ協奏曲イ短調≫では、厳しい学内オーディションで選抜された奥村奈々（大学3年・9/9、11）と岩永圭司（大学院修士課程1年・9/4、13）の両名がソリストをつとめ、真摯な演奏を披露しました。さらに、ブラームス：≪交響曲第2番≫の優美な調べを存分に聴かせ、学生たちが積み重ねた努力の成果に、各会場とも温かい拍手が送られました。

また、川越公演では同窓会埼玉県支部会員の佐藤美枝子さんが特別出演し、オペラ≪椿姫≫よりアリアを披露して、満員となった演奏会に華を添えました。

ヴィルトゥオーソ学科新人演奏会

平成23年6月2日　ベートーヴェンホール（江古田）

濱 初帆（マリンバ）

関根翔子（ピアノ）

荒井茉里奈（ピアノ）

守岡未央（トランペット）

ベートーヴェンホールを舞台に多彩な演奏会開催

ロバート・ダヴィドヴィッチ ヴァイオリン・リサイタル

ソロや室内楽、コンサートマスター、芸術監督、大学教授と多彩な分野で活躍し、本学にも度々客員教授として招かれている、ロバート・ダヴィドヴィッチ教授のヴァイオリン・リサイタルが6月9日、江古田キャンパス ベートーヴェンホールにて開催されました。

プログラム前半は、メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第3番、コダーイ：セレナード ヘ長調、R.シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調。共演は、ピアノ：岡崎悦子、ヴァイオリン：増田加寿子、ヴィオラ：シャンドール・ナジ、チェロ：前田善彦ら、すでに何度か共演をしている本学教員メンバーで、息のあったアンサンブルは圧巻。プログラム最後のブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調では、叙情的なメロディと重厚なアンサンブルを熱演し、室内楽の魅力溢れた演奏会となりました。

ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル

毎年、本学客員教授として着任し、指導にあたっている、ケマル・ゲキチ教授のピアノ・リサイタル ―リスト生誕200年記念 オール・リスト・プログラム― が、6月30日ベートーヴェンホールで開催されました。

ゲキチ教授は、今や世界的に活躍しているピアニストのお一人ですが、特にリストの演奏ではその第一人者として著名であり、今回のプログラムは、1,600曲を超えるリストの作品の中から、比較的知名度の低い珍しい楽曲に光をあてたものでした。

プログラム前半は、演奏会用大独奏曲、≪詩的で宗教的な調べ≫より〈死者の追憶〉、ハンガリー風の英雄行進曲、ギャロップ イ短調のオリジナル曲。後半は、システィーナ礼拝堂で―アレグリの≪ミゼレレ≫とモーツァルトの≪アヴェ・ヴェルム・コルプス≫による、ヴェルディの歌劇≪アイーダ≫聖なる踊りと終幕の二重唱、パチーニの歌劇≪ニオベ≫の動機による大幻想曲、グリンカの歌劇≪ルスランとリュドミラ≫より〈チェルケス人の行進曲〉とオペラなどの編曲作品でした。教授による各作品の背景や聴き所の解説が添えられ(訳・解説：福井直昭教授)、会場では、熱心にメモを取る人が多く見られました。

音楽的、多面的に熟考された解釈と高度なテクニックを駆使して、繊細な音色からオーケストラを彷彿させる幅広い音楽を表現。情熱的で力強い演奏で満員の聴衆を熱狂させました。リストの知られざる名曲に触れた、リストイヤーに相応しい貴重な演奏会となりました。

武蔵野音楽大学 室内管弦楽団演奏会

ミュンヘン・フィルやバイロイト祝祭管弦楽団のコンサートマスターを長年務めた、クルト・グントナー客員教授指揮による武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会が、去る7月1日、江古田キャンパス ベートーヴェンホールにおいて開催されました。プログラムはヤナーチェク作曲「牧歌」、モーツァルト作曲クラリネット協奏曲 イ長調 K.622（独奏：平田彩圭〔大学院1年〕）、ハイドン作曲 交響曲 第91番 変ホ長調。ヤナーチェクでは繊細な弦楽器の響きを活かした美しいハーモニーを、またモーツァルトは若々しいソリストの明るい音色で、また後半のハイドンではオーボエとホルンも加わった軽快な演奏を聴か

せてくれました。次回は12月9日にベートーヴェンホールで開催を予定しています。

天羽明恵
ソプラノ・リサイタル

超絶的コロラトゥーラとリリックな声を持ったソプラノ歌手として内外で活躍されている、天羽明恵女史のソプラノ・リサイタルが、7月5日、ベートーヴェンホールで開催されました。プログラムは、R.シュトラウス：≪C.ブレンターノの詩による6つの歌曲≫、ミヨー：≪4つのロンサールの歌≫、ヴォルフ：≪歌とピアノのためのメーリケ詩集≫より、シェーンベルク：≪4つの歌≫、ウルマン：≪R.フーフによる5つの愛の歌≫と19世紀末から20世紀に活躍した作曲家の作品で組まれました。

詩と音楽が密接に結びついたリー

ト作品。女史の表情豊かな歌唱はオペラの一場面を観ているようで、詩の内容を見事に表現していました。ピアノは、女史との共演が多い子安ゆかり講師。歌声に寄り添い、時にリードして雄弁に詩を語り、歌との融合が大変美しく、聴き応えのある演奏会でした。アンコールでは、シューベルトの「鱒」や日本歌曲の「からたちの花」が披露され、リートの世界を堪能した一夕となりました。

自然の懐で音楽教室ミュージックキャンプ

豊かな自然にかこまれた武蔵野音楽大学軽井沢高原研修センターで、今年も夏休み恒例の大学附属音楽教室“ミュージックキャンプ”が開催されました(入間・多摩音楽教室は7月31日～8月2日、江古田音楽教室は8月2日～4日)。生徒たちは2日目に行われるコンサートに向けて、先生方の指導のもと、室内楽や合唱などの練習に心をひとつに集中して励み、短期間に驚くほどの上達ぶり。当日の生き生きとした素晴らしい演奏が、参加者全員の忘れられない夏の思い出になりました。このキャンプは小学生から高校生までの幅広い年齢層の生徒たちが、音楽という共通の目標に向って生活を共にし、交流を深めるユニークな催し。毎年連続して参加する生徒も多く、音楽面でも生活面でも全員が協力し、それぞれに自分の役割を立派に果たした充実の3日間でした。

●表紙の顔

ツォルト・ティバイ教授

ツォルト・ティバイ教授は、1993年より武蔵野音楽大学に客員教授として着任、レッスン、室内楽、オーケストラの指導にあたられ、優秀な学生を多数育てています。

'49年ブダペスト生まれ。バルトーク音楽院においてL.モンターグに師事しました。その後リスト音楽院において、父のゾルタン・ティバイに師事し、'72年に同音楽院を卒業。'70年よりハンガリー国立歌劇場管弦楽団に入団し、'76年より首席奏者を務めました。そのほかブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団、ブダペスト・ウィンド・アンサンブル、ブダペスト祝祭管弦楽団のメンバーとしても活躍し、'88年からは、定期的にオーストリア＝ハンガリー・ハイドン管弦楽団と共演するなど多数の演奏会とレコーディングを活発に行っています。特に'04年フンガロトンよりリリースした本学福井直昭教授との CD「DOUBLE BASS RARITIES (HCD32284)」は、ハンガリー放送やグラモフォン誌等で絶賛を博しています。

一方でリスト音楽院において後進の指導にもあたり、2010年には、ゾルタン・ティバイ生誕100周年記念国際マスターコースを開催。また練習曲の楽譜も出版するなど幅広い活動を展開しています。'95年から'00年まで東京藝術大学講師。

現在、武蔵野音楽大学客員教授。

武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室 第20回オペラ公演のお知らせ

E. フンパーディンク作曲「ヘンゼルとグレーテル」
演出：大谷洌子／指揮：前田 淳
■日時：2012年1月14日㈯ ①14時30分～ ②18時30分～
15日㈰ ①13時～ ②17時～
■会場：武蔵野音楽大学ベートーヴェンホール
■料金：2,500円（指定席A） 2,000円（指定席B）
＊お問合せ：附属江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

コンクール・オーディション名	部門	詳細	氏名	学年・専攻
瑞宝中綬章受章			市田　儀一郎	昭和29年大学卒ピアノ専攻
第58回　カンヌライオンズ 国際クリエイティビティ・フェスティバル（フランス） 作品「森の木琴」	サイバー部門 サウンドデザイン	金賞受賞	松尾　謙二郎	平成3年大学卒コントラバス専攻
	フィルム・クラフト部門 サウンドデザイン	金賞受賞		
	フィルム部門	銀賞受賞		
ゲルダ・リスナー国際声楽コンクール 2011（アメリカ）ファイナル		奨励賞受賞	大西　宇宙	平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了
リチア・アルバネーゼ・プッチーニ 国際声楽コンクール　2011（アメリカ）ファイナル		入賞		
ジュリオ・ガーリ国際声楽コンクール 2011（アメリカ）ファイナル		入賞		
第30回　飯塚新人音楽コンクール	ピアノ部門	第1位入賞、文部科学大臣賞、朝日新聞社賞、飯塚市長賞、飯塚文化協会飯塚賞受賞	八尋　三菜子	平成17年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了
	声楽部門	第3位入賞	但馬　由香	平成12年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了
第47回　日伊声楽コンコルソ		第2位入賞、読売新聞社賞、日伊音楽協会賞受賞	曽我　雄一	平成12年大学卒声楽専攻
		入選	井上　奏	平成17年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了
		入選	眞塩　直	平成19年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了
第4回　神戸芸術センター記念ピアノコンクール		金賞受賞	八尋　三菜子	平成17年大学卒ピアノ専攻　本大学院修士課程修了
第15回　日本フルートコンヴェンション 2011　コンクール	ソロ部門	入選	佐藤　純	平成18年大学卒フルート専攻　本大学院修士課程修了
	ピッコロ部門	入選	阿部　麻耶	平成12年大学卒フルート専攻
	アンサンブル部門	第1位入賞	山内　豊瑞	平成19年大学卒フルート専攻
			白石　法久	平成18年大学卒フルート専攻
		入選	横山　聡子	平成12年大学卒フルート専攻　本大学院修士課程修了
			高嶋　光江	平成15年大学卒フルート専攻
		入選	堺　由美	平成6年大学卒フルート専攻
			小池　薫	平成11年大学卒フルート専攻
第3回　東京国際声楽コンクール	大学生部門	第1位入賞、 東京新聞賞受賞	塚村　紫	大学4年次在学声楽専攻
第29回　ソレイユ音楽コンクール	声楽部門	第3位審査員奨励賞受賞	杉山　由紀	平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了
第25回　エターナルピアノコンクール	PF専門課程部門	第1位入賞	大友　藍花	平成17年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了　本特修科修了
第13回　“万里の長城杯”国際音楽コンクール	声楽部門　一般の部A	第1位入賞	飯島　典子	平成18年大学卒声楽専攻 本高校卒　本大学院修士課程修了
第14回　“長江杯”国際音楽コンクール	弦楽器部門　一般の部A	第2位入賞	原　悠一	平成23年大学卒チェロ専攻
	ピアノ部門　大学の部	第6位入賞	荻野　愛菜	大学3年次在学ピアノ専攻
	管楽器部門　大学の部	第6位入賞	柴原　研人	大学3年次在学フルート専攻
		第6位入賞	新堀　詠子	大学3年次在学フルート専攻
第11回　全日本アールンピアノコンペティション	F級	第6位入賞 （1、2、3位なし）	南　沙紀	大学3年次在学ピアノ専攻
第19回　ヤングアーチストピアノコンクール	ピアノ独奏部門 Fグループ	入賞	松本　季	大学1年次在学ピアノ専攻
	ピアノ独奏部門 Cグループ	金賞受賞	所山　武司	附属江古田音楽教室在室 西東京市立谷戸第二小学校5年生
	ピアノ独奏部門 プレAグループ	優良賞受賞	福光　隼	附属江古田音楽教室在室 武蔵野音楽大学第一幼稚園在園
第8回　草加市演奏家協会 クラシック音楽ジュニアコンクール	E部門〔高校生〕	奨励賞受賞	山本　己太郎	附属江古田音楽教室在室　埼玉県立草加南高校3年生
第4回　国際ジュニア音楽コンクール	ヴァイオリンE部門	入選	御供　信薫	附属江古田音楽教室在室　巣鴨中学校2年生
	ヴァイオリンD部門	第2位入賞、 京葉銀行賞受賞	大島　弓人	附属江古田音楽教室在室 越谷市立千間台小学校6年生
	ピアノA部門	第1位入賞、千葉商工会議所女性会賞、レッスンの友賞、ムジカノーヴァ賞、ショパン賞受賞	長谷川　杏海	附属江古田音楽教室在室 おがわ幼稚園在園

平成23年度
武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校
学校説明会・オープンキャンパスのお知らせ

武蔵野音楽大学・附属高等学校に進学希望の小・中・高校生とその指導者、保護者の方々を対象とした学校説明会・オープンキャンパスを下記のとおり開催します。

■日時：11月13日㈰ 10：00～16：00
■会場：武蔵野音楽学園　入間キャンパス　■申込締切：10月28日㈮

【説明会の内容】
●ガイダンス（大学・高等学校別に行います）　●ミニ・コンサート
●受験相談（希望者のみ）　●ワンポイント・レッスン（希望者のみ）
●参加無料（簡単な昼食を用意します）

【お申込み・お問合せ】武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1
TEL.03-3992-1125　FAX.03-3991-7599
＊ 学園のホームページ、携帯サイトからも、お申し込みができます。

着任外国人教授紹介

（平成23年度後期）

ジェームズ・ランブレクト
James M.Lambrecht
（ウィンドアンサンブル指揮／アメリカ）

ウィスコンシン大学ホワイトウォーター校を卒業後、インディアナ大学にて博士の学位を取得。指揮法、トランペットを学ぶ。オリベット大学准教授を経て、オーガスタナ大学バンドディレクター及びトランペットの教授に就任。以後20年以上にわたって同大学シンフォニックバンドの指揮、トランペット奏法、金管アンサンブル奏法などの指導にあたっている。現在、米国各地において客員指揮者やソロ奏者として幅広く活躍している。本学客員教授。

平成23年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ

イリヤ・イーティン　ピアノ・リサイタル　10月13日㈭ 18:30 ベートーヴェンホール（江古田）　¥1,000〈全席自由〉
曲目＝J.S.バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV826、ベートーヴェン：ソナタ 第32番 ハ短調 Op.111　他

武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会
指揮＝前田 淳　11月11日㈮ 18:30 バッハザール（入間）　一般¥1,500/小中高¥1,000〈全席自由〉
曲目＝グレインジャー：モールバラ公爵のファンファーレ、ガーシュウィン：キューバ序曲　他

ブラームス・ヴァイオリン・ソナタの夕べ　～クルト・グントナー（ヴァイオリン）・藤原由紀乃（ピアノ）
11月18日㈮ 18:30 ベートーヴェンホール（江古田）　¥1,000〈全席自由〉
曲目＝ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調《雨の歌》Op.78、ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.100　他

市民コンサート　武蔵野音楽大学管弦楽団（入間）演奏会
指揮＝北原幸男　11月23日㈬ 14:30 バッハザール（入間）　入場無料〈要入場整理券〉
曲目＝チャイコフスキー：イタリア奇想曲 Op.45、ベートーヴェン：交響曲 第3番 変ホ長調 Op.55「英雄」　他
（主催、お問合せ：入間市立中央公民館　TEL.04-2964-2413）

ニュー・ストリーム・コンサート16　～ヴィルトゥオーソ学科演奏会2～
11月25日㈮ 19:00 トッパンホール　¥1,500〈全席自由〉
出演＝矢沢まどか（ヴァイオリン）、川口真貴子（メゾ・ソプラノ）、福井敬介（ピアノ）、山口呉奈（マリンバ）、荒巻友利恵（オーボエ）、園川千晴（ピアノ）

武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会　12月 2日㈮ 18:30 バッハザール（入間）　¥1,500〈指定席〉
指揮＝円光寺雅彦　合唱指揮＝栗山文昭　12月 5日㈪ 19:00 東京オペラシティ コンサートホール　¥1,500〈全席指定〉
独唱＝ソプラノ：山口道子、メゾ・ソプラノ：森永朝子、テノール：樋口達哉、バリトン：谷 友博
曲目＝ドヴォルジャーク：テ・デウム Op.103、ベートーヴェン：交響曲 第9番 ニ短調 Op.125 「合唱付き」

武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会（練馬区文化芸術振興支援事業）
指揮＝クルト・グントナー　12月 9日㈮ 18:30 ベートーヴェンホール（江古田）　¥1,000〈全席自由〉
独奏＝ピアノ：井上 茜、トランペット：二井田ひとみ
曲目＝ショスタコーヴィチ：ピアノとトランペットのための協奏曲 第1番 ハ短調 Op.35、ハイドン：交響曲 第57番 ニ長調 Hob.I:57　他

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会　12月19日㈪ 18:30 東京オペラシティ コンサートホール　¥1,500〈全席指定〉
指揮＝ジェームズ・ランブレクト
曲目＝八木澤教司：「ペルセウス」－大空を翔る英雄の戦い－、バーンズ：交響曲 第3番 Op.89　他

お問合せ　●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部　TEL.03-3992-1120　●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部　TEL.04-2932-3108
※講師の病気、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※チケットは武蔵野音楽大学ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/ でも予約ができます。

武蔵野音楽大学・附属高等学校 平成23年度冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	平成23年12月23日㈮～26日㈪	平成23年11月12日㈯～12月12日㈪	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
高校音楽科受験講習会	平成23年12月24日㈯～26日㈪		

要項請求：直接広報企画室へ、またはホームページ、携帯サイトにてお申し込みください。要項は無料、郵送料は学園が負担します。
お問合せ・お申込み：武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125　ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/　携帯サイト http://musaon.jp/

平成24年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。
要項をご希望の方（平成24年度受験対象者）には無料でお送りいたします。本学ホームページ、携帯サイトの資料請求フォームよりご請求ください。お電話でお申し込みされる場合は、氏名、住所、電話番号および附属高校・大学1年次・大学3年次・大学院・別科の別をお知らせください。なお、冬期受験講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

【お問合せ・請求先】武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1
TEL.03-3992-1125（広報企画室直通）

編集後記

巻頭に原稿をいただいた上田昭夫さんの著書より――「伸びる選手に共通して言えることですが、当初ラグビーがあまりうまくなくても、素直で情熱を持った子というのはうまくなります」。音楽の道においても、大切なのはやはり“情熱”ではないでしょうか。

毎号、コラム「音楽余話」で音楽を巡る楽しいお話を紹介してくださったコンスタンティン・ガネフ教授が、奥様ジュリア・ガネヴァ教授のご都合により母国ブルガリアに帰国されました。本誌Vol.96の表紙撮影の際、どのようなポーズの注文にもにこやかに応じてくださったお二人のやさしい笑顔が忘れられません（編）。

武蔵野音楽大学楽器博物館だより――

ポジティーフ・オルガン

辻オルガン製　日本　1966年　高さ222cm

ポジティーフ・オルガンの名称は、足鍵盤を持たない小型の据え置き型パイプオルガンに使われる。写真の楽器は、東京バッハ協会の故原田一郎氏が、「辻オルガン」社の創始者、故辻宏氏に製作を依頼した、わが国で戦後初の国産パイプオルガンである。

原田氏はバッハ研究に携わる中で、バッハ研究の大家であり、ノーベル平和賞受賞者としても名高いシュヴァイツァーの著書から、バッハのカンタータの独唱や小編成の楽曲の伴奏の楽器として、ポジティーフ・オルガンが不可欠であることを知った。シュヴァイツァーは、バッハ自身が聖トーマス教会の大パイプオルガンを解体し、独立した小型のオルガンを製作させた事実を取り上げ、バッハがカンタータの伴奏にはこのようなポジティーフ・オルガンを使用していたと主張している。

ポジティーフ・オルガンの購入を決意した原田氏は、外国製の楽器に頼るのではなく、この契機に日本国内で再びパイプオルガンの製作が始まることを願った。国産最古のパイプオルガンとしては、1932年に現在のヤマハ株式会社が製作した記録が残されている。しかし大戦により多くのオルガンが焼失するとともに、パイプオルガン製造の伝統も途絶えてしまっていた。そのような中で原田氏は、日本人の手によるこの楽器の継続的な製造ライン構築の必要性を痛感していたのである。

このオルガンには、限られた面積に効率よくパイプを配置し、前面の扉を閉めることで消音の効果を持たせるなど、日本の家屋での使用に配慮した設計がなされている。この楽器の温かく心に染み入る音色は、わが国のオルガン文化の発展を祈った先達の想いを今の私たちに伝えてくれる。

（武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵）

目　次

新たなチャレンジに胸躍らせて …… 1
上田昭夫

音楽余話 …… 4
天職？ 芸術の否定？　福田 弥

海外音楽事情 …… 5
モスクワ音楽院から世界の舞台へ②　イリヤ・イーティン

卒業生インタビュー …… 7
人の心に響く曲を作りつづけたい　八木澤教司

音楽の万華鏡 …… 9
作品の衝撃　楢崎洋子

MUSASHINO NEWS …… 10
- 各地で喝采！ ウィンドアンサンブル＆管弦楽団 演奏会
- ベートーヴェンホールを舞台に多彩な演奏会開催
- 自然の懐で音楽教室ミュージックキャンプ
- 武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室　第20回オペラ公演のお知らせ
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 平成23年度武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 学校説明会・オープンキャンパスのお知らせ
- 着任外国人教授紹介
- 平成23年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ
- 武蔵野音楽大学・附属高等学校 平成23年度冬期講習会のお知らせ
- 平成24年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発　行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）
http://www.musashino-music.ac.jp/

2011年10月1日発行　通巻第99号
携帯サイト http://musaon.jp/